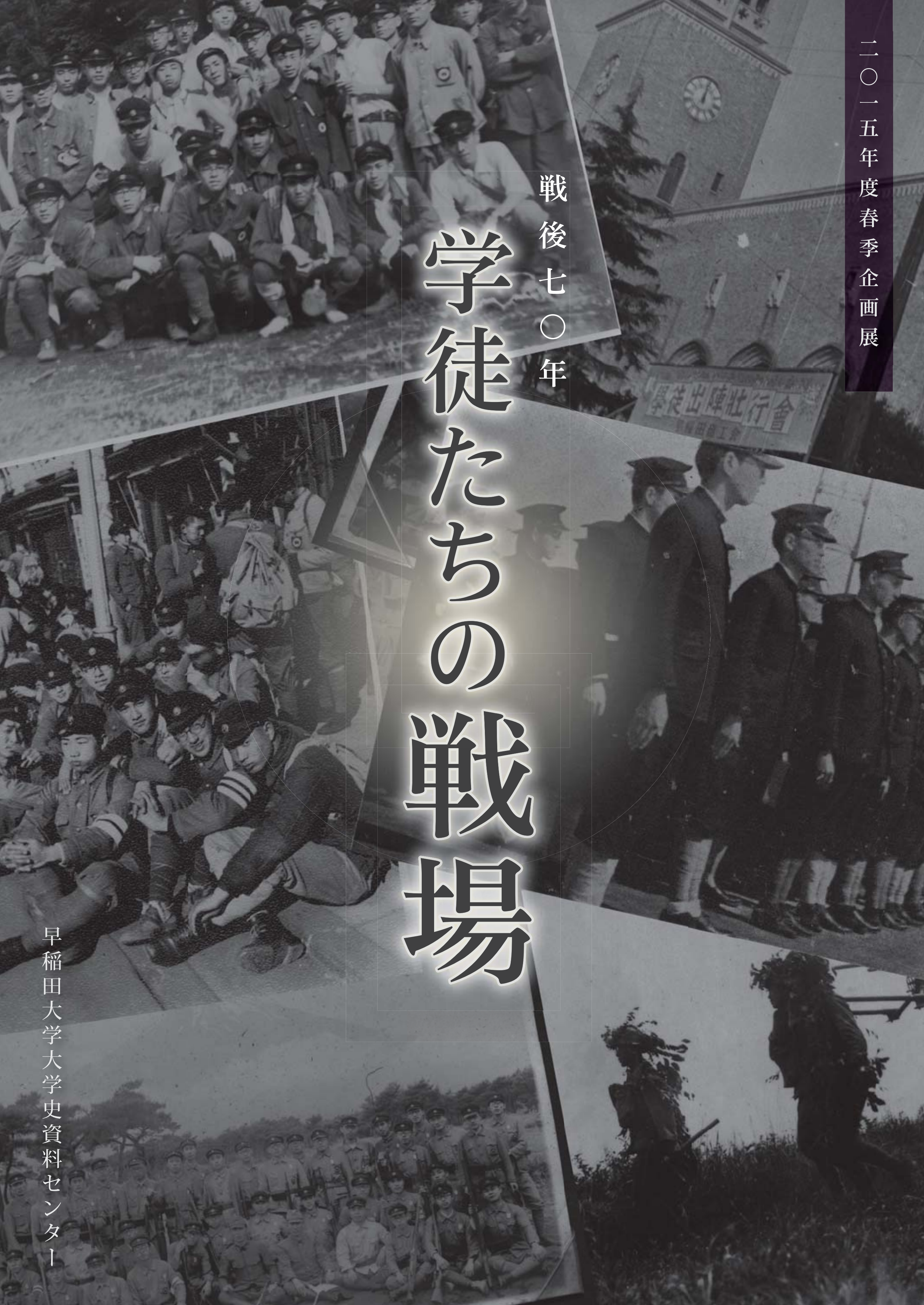
二〇一五年度春季企画展

戦後七〇年

学徒たちの戦場



早稲田大学大学史資料センター

2015年度春季企画展

学徒たちの戦場―戦後七〇年―

1945年８月15日の敗戦から70年が経過した今、戦後日本社会が共有していた戦争やそれにまつろう記憶、あるいは学徒出陣や学徒兵に関するイメージの多くが、急速に薄らいでいる。

それでも、1943年に在学生の徴兵猶予が廃止されたことや、同年10月の出陣学徒壮行会の風景、学徒兵の特別攻撃隊―いわゆる特攻―による戦死などは、現在でも書物や映像などによって語り継がれ、多くの人々に強く記憶されている。このような学徒出陣や学徒兵に関する“語り”は、“在学生の悲劇の戦死”というイメージに収斂するという特徴を持っているといえるであろう。

しかし、周知のように、戦争に駆り出された“学徒”が狭義の出陣学徒にとどまらないことはいうまでもない。1941年10月には、修業年限が３ヵ月短縮され、学生の多くが学業半ばで戦地へ送り込まれた。この繰り上げ卒業は、1942年からさらに３ヵ月短縮（修業年限は２年６ヵ月）され、1944年まで継続した。戦況の悪化やそれによる経済的事情により高等学院から大学への進学を断念した学生も少なくなかった。

また、既卒者の多くも徴兵の対象となり、戦地へ出征した。彼らのなかには家庭を持つものも多く、出陣学徒とは異なる戦争による“犠牲者”となった。同時に、戦死した“学徒”の遺族や友人たちは、彼らの死と向き合い、戦後社会を生きていくこととなった。

さらに、戦地から生きて生還した学徒兵たちについては、その経験や、彼らの存在すら語られることが少なかった。“幸運”にも戦地から復員を果たした学徒兵も、戦争の記憶と、戦死した“仲間”に対する贖罪の意識を持ち続けながら、戦後社会を生き抜かねばならなかった。

戦争と学徒兵、あるいは戦争と大学との関わりを問い直す際には、“出陣学徒”という狭いフレームワークに固執するのではなく、繰り上げ卒業生組や既卒“学徒兵”、あるいは復員学徒や遺族たちが“生きた”戦後、という問題にまで視野を拡げることが求められている。

戦争や学徒たちの戦死を、悲劇や英雄譚として語り継ぐのではなく、自らの死と向き合うことを余儀なくされた学徒兵の姿を直視し、また、彼らや家族・仲間をそのような境遇に追い込んだ戦争というものの本質をあらためて問わなければならないといえよう。

※本図録に掲載した資料は、特に記載のない限り早稲田大学大学史資料センター所蔵です。
また、掲載した写真・資料は、展示資料の一部です。

I
“日常”から戦場へ

1941年12月８日、日本はアメリカ・イギリス等に宣戦布告し、ついに泥沼の戦争へと突入していった。戦局の悪化と戦力不足を見越して、同年10月に学生の修業期間が３ヵ月短縮され、在学生にとっても戦争は避けられないものであることが明確となった。翌1942年以降は、最高学年の授業期間が６ヵ月に短縮され、学業の半ばで多くの学生が戦地へと送り込まれた。

さらに、学生に与えられていた徴兵猶予の特典も1943年10月には廃止され、徴兵年齢に達した学生は在学資格のまま出征・入営することとなった。入営中の学徒兵の身分は、基本的に休学扱いとされた。翌年９月の卒業予定者には仮卒業證書が発行され、戦地で卒業を迎えることとなった。しかし、戦死後に卒業扱いとなり、遺族に卒業証書が届けられる場合もあった。

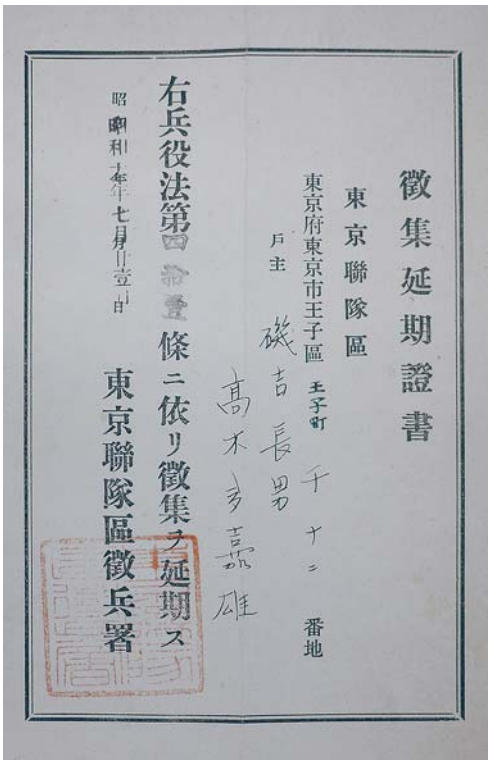
1944年からは徴兵年齢が19歳に引き下げられ、まさしく学生に対する“根こそぎ”の動員が行われた。

一方、学生たちは徴兵と出征を、自らの“使命”として―もちろんどこまで本意かを問うことは出来ないが―受け入れていた。出征と“死”がほぼ同一であると認識されたからこそ、出征までの学生生活は彼らにとって貴重な時間となった。

また、彼らを送り出す側の様相も決して一様ではなかった。公式な場では、国家への忠誠と勇ましい死を称賛するような言葉が繰り返されたが、その一方で、私的な空間、あるいは教室という決して自由が保障されていたとはいえない教室という場においても、彼らの“生きた生還”を望む声は確かに存在した。

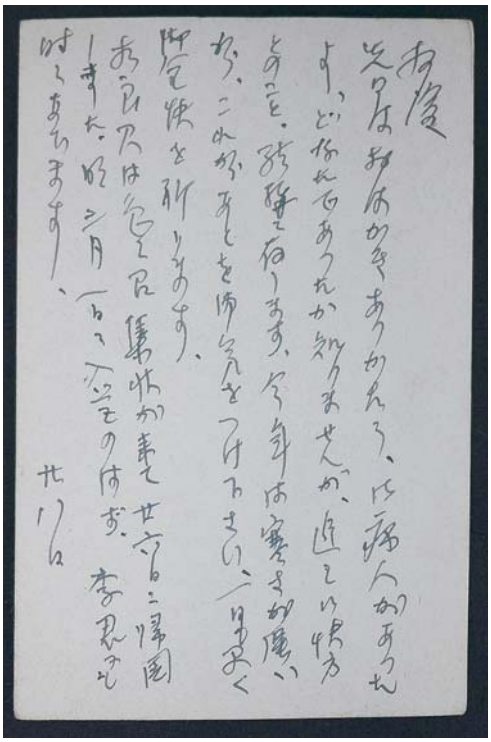
このような声は、同時代においても、あるいは戦後社会においても、戦時体制と国家主義という声高な暴力によって押し潰され、また戦死を美名として賞賛するような言葉によって打ち消されてきた。しかし、学徒の死を望まなかった家族や仲間たちの人間としての素直な声に、私たちは耳を傾けなければならないであろう。

主な展示資料


徴集延期證書
東京聯隊區
東京府東京市王子區 王子町 千 ナニ 番地
戸主 磯吉長男 高木多嘉雄
右兵役法第四十壹條ニ依リ徴集ヲ延期ス
昭和十年七月廿壹日
東京聯隊區徴兵署

徴集延期証書（高木多嘉雄）
東京聯隊区徴兵署／1942年 7 月21日

高木多嘉雄は1922年東京出身、1943年10月早稲田大学政治経済学部在学中に学徒出陣、1945年 3 月フィリピン・ルソン島で戦死。



田村専之助宛 津田左右吉 葉書
1942年 2 月28日

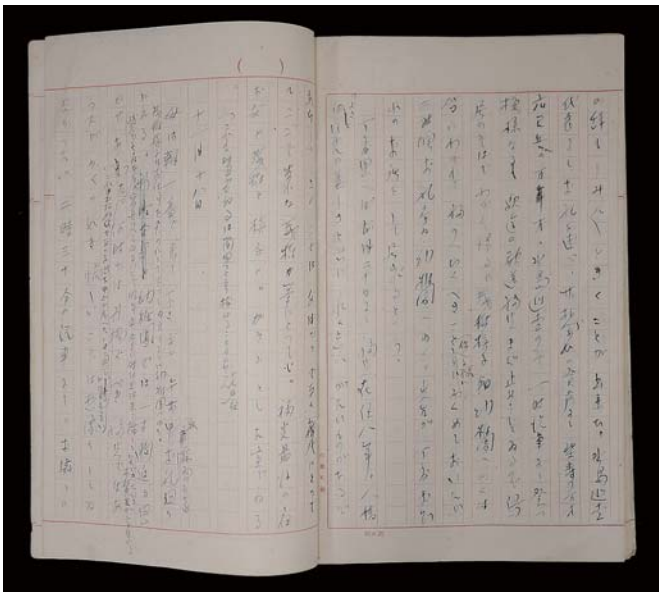
相良克明に召集が来たことをしらせる津田左右吉の書簡。相良は福島県出身、1929年 3 月早稲田大学文学部卒業、卒業後は文学部講師をつとめる。1942年 3 月召集、1943年10月フィリピンで戦死。

武野藤介『長編小説・学徒出陣』
1944年 5 月発行

作者は早稲田大学中退、登場人物の一人慎之介も早稲田の国文科卒業である。

扇子（市島保男出陣に際しての寄書き、於浅草騎西屋）
1943年10月10日

扇面に書かれた寄書き。学徒出陣に際して送られたもの。勇ましい戦死を謳ったものばかりでなく、“祈　武運長久　しっかりやろうぜ”という洒脱なものから、“生きて生きて　生き抜きて死せんことを　願ふのみ”といった率直な内容の記述まで多彩である。



出征の記（東部第四十八部隊）
福冨謙二／1943年11月21日午前９時

福冨謙二は1910年生れ、1933年早稲田大学商学部卒業。卒業後は金沢貯蓄銀行に勤務、結婚し子供３人を授かるも、1943年11月に臨時召集となった。満州地域から宮古島を転戦、1945年４月沖縄野戦病院で死去。

昭和18年学徒出陣壮行会（専門部法律科Ｂクラス）
1943年10月頃

学徒出陣直前の壮行会（大田区石田清一郎宅にて）
1943年10月頃

昭和十九年学徒出征
1944年12月

木村時夫の回顧

木村時夫は1920年生れ、早稲田大学在学中の1943年10月に学徒出陣を経験、中国大陸を転戦し、1945年12月に復員。戦後は、早稲田大学社会科学部教授、同社会科学研究所々長などをつとめた。2009年死去。

木村は1943年の大学主催の学徒出陣壮行会前に行われた史学科による壮行会のことを以下のように書き残している。教員煙山専太郎が学生たちに投げかけた言葉は、当時の社会状況を考えれば異質な、そして相当の覚悟を要するものであった。

……

飲むものも食べるものもない、ただ言葉と言葉だけの会であった。今は亡き煙山専太郎先生が、教員を代表して我々に贈られた言葉は、大要つぎのようなものであった。

「軍隊という所は野蛮な所である。諸君の教養がこれをいくらかでもよくすることが出来ればと期待する。諸君決して死んではならない、血気にはやったり、変な責任感にとらわれて死を急いではならない。是非元気で帰ってきてほしい。古来、中国では人を送るに酒をもってするというが、今はそれがない。詞をもって送るを、次によいとするが私にはそれも作れない。ただ、言葉をもって送るだけで、諸君には誠に相済まない」

しかし、私には先生の言葉が一番嬉しかった。時局便乗というのか、当時の中年以上の者がやたらに我々青年に安易な死を求める風潮があったからである。

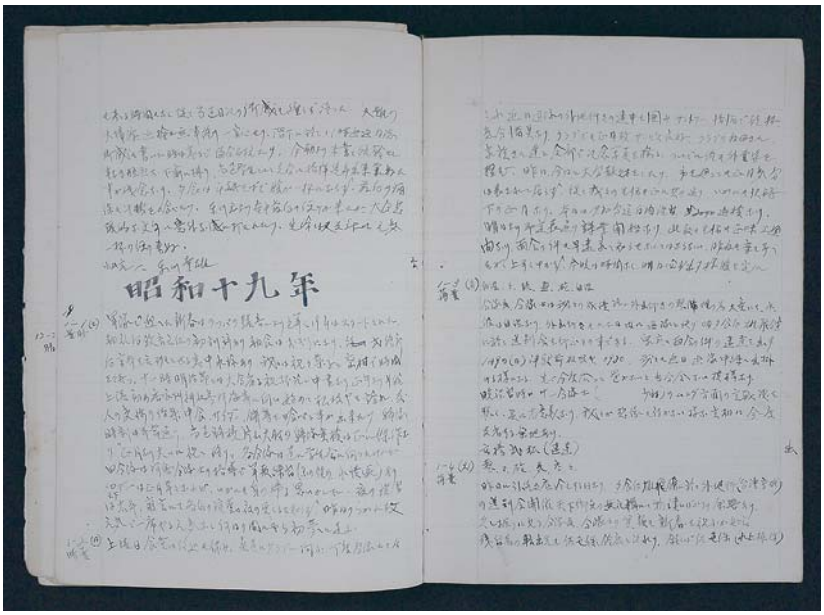
木村時夫「早稲田大学百年の回顧」より
『紺碧の空なほ青く』早稲田学生新聞会編、1977年に所収

入営と訓練の日々

徴兵対象となった学徒たちは、まず主に出身地で徴兵検査を受けることとなった。検査の結果によって配属される部隊が決定され、本格的な軍隊生活が始まった。彼らの軍隊での生活は、まさしくカルチャーショックの連続であった。大学という“自由”と“権利”とが保障された空間で生きた学徒たちにとっての軍隊生活とは不条理と不自由の空間であり、暴力によって絶対服従を強いられる場であった。

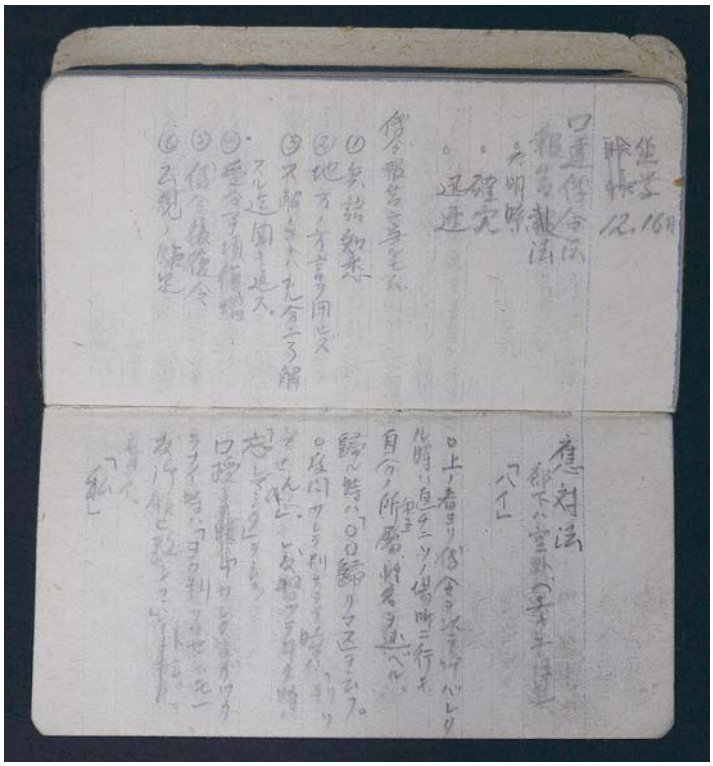
周知のように、陰険なイジメ、露骨な暴力が学徒兵を苦しめた。その一方で、配属部隊、特に陸軍と海軍ではその軍隊経験も大きく異なった。海軍特別飛行隊のように、高度な技術取得を求められた部隊の場合は、その生活も長期にわたった。そのため、出征までの期間に、家族との往復書簡や手記など、多くの関係資料を遺すことが可能となった。

主な展示資料



忘備帳
高橋久雄／1943年10月～1944年２月

高橋久雄は、1943年９月早稲田大学専門部政治経済科を繰り上げ卒業、同年10月召集、1944年９月東港で戦死。資料は、三重海軍航空隊・海軍予備生第四分隊第一班時代の手帳。



手帳（武山海兵団入団前後の日記を含む）
市島保男／1943年12月～

アルバム（第14期海軍飛行専修予備学生）
堀家醇／1944年頃

Ⅱ
戦場の学徒たち

内地部隊で訓練を終えた学徒は、ただちに実際の戦争に投入された。敗戦間際になると、連隊での訓練もままならないまま、戦地へと送られるケースも少なくなかった。

学徒たちの戦場は多岐にわたった。中国大陸から東南アジア、フィリピンからニューギニア方面へと広がり、いくつかの戦地を転々とした学徒も多く、戦地での生活は数年にわたった。

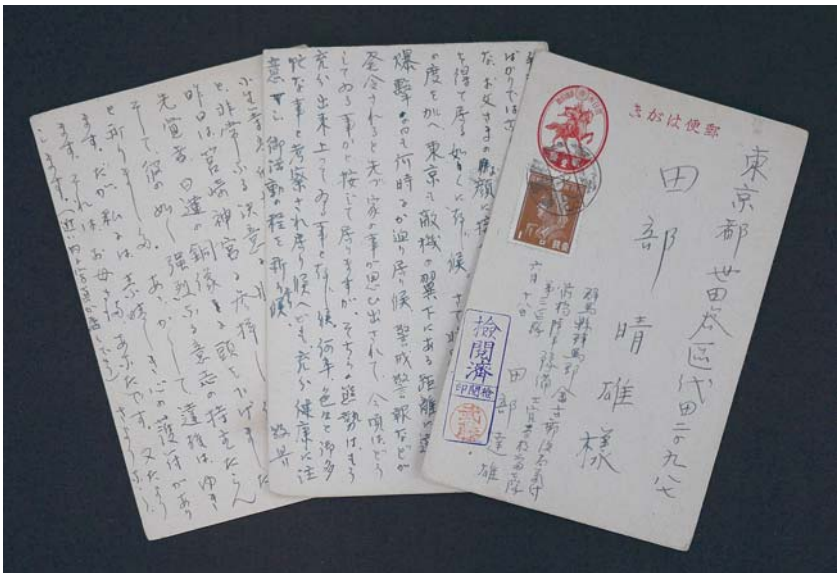
戦地での学徒たちの生活、あるいは彼らの“姿”を写し出すような資料は限りなく少ないといえよう。激戦地であればあるほど、あるいは部隊が壊滅しジャングルでの逃避生活を余儀なくされた学徒たちに、自らの思いや存在を証明する余裕など存在しなかった。苛烈な戦場に身を置いた学徒たちのなかには、家族への連絡や、遺書を書く機会すら与えられなかった。このことに、私たちは想像を馳せなければならない。

そのような戦場における学徒たちの“姿”を知る上で、内地の家族や友人との往復書簡は貴重な資料となる。書簡の内容は、家族への感謝や内地での空襲被害を心配する声、あるいは自らの死後に遺される家族への憂慮など、多岐にわたっている。検閲という制約があったにもかかわらず、また戦争や国家を賛美する美辞麗句の裏側に、学徒たちの率直な心境を読み取ることができる。

主な展示資料

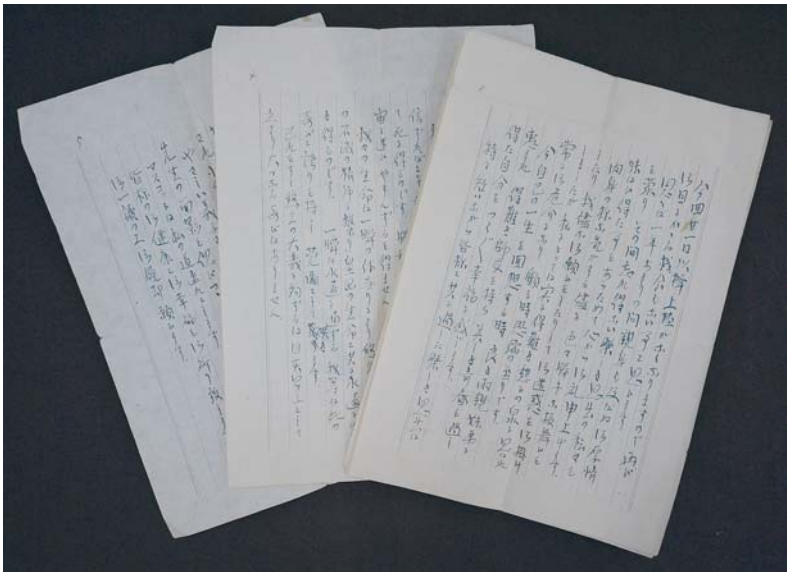
【椎根幸雄氏所蔵資料】　椎根幸雄宛 椎根正 葉書
1945年 1 月 3 日

椎根正は1922年生れ、1943年 9 月早稲田大学高等師範部を繰り上げ卒業。入営後は、海軍第十三期飛行予備学生として土浦や福山で訓練を受けた。1945年 6 月沖縄周辺で戦死。



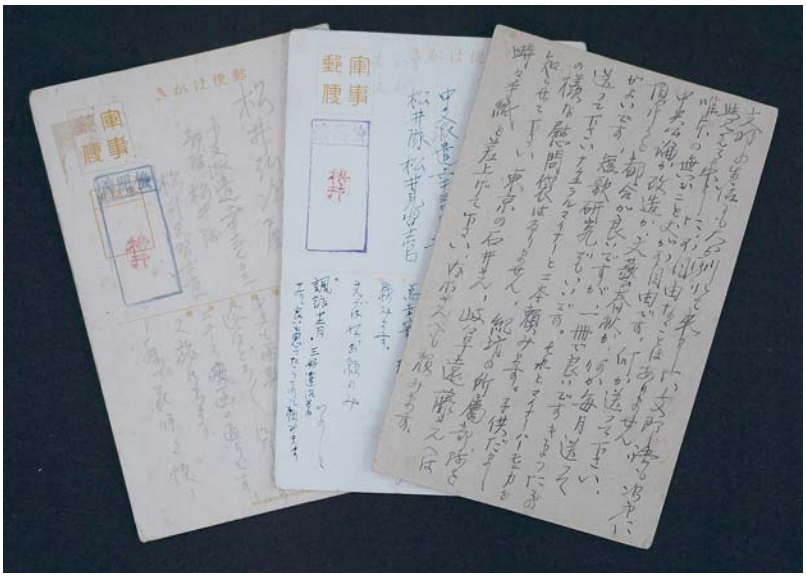
家族宛 田部達雄 葉書
1944年 6 月～ 9 月

田部達雄は1923年東京出身、1943年10月早稲田大学政治経済学部進学と同時に学徒出陣となった。入営後は、前橋予備士官学校に入校、1945年 3 月フィリピン・ルソン島で戦死。



中村万作宛 市島保男 書簡
1945年 4 月頃

特攻出陣を直前にして、中村牧師に対してこれまでの厚情を謝すとともに決意を述べた書簡。市島保男は1943年10月早稲田大学商学部在学中に学徒出陣、1945年 4 月神風特別攻撃隊員として沖縄東南海上で戦死。

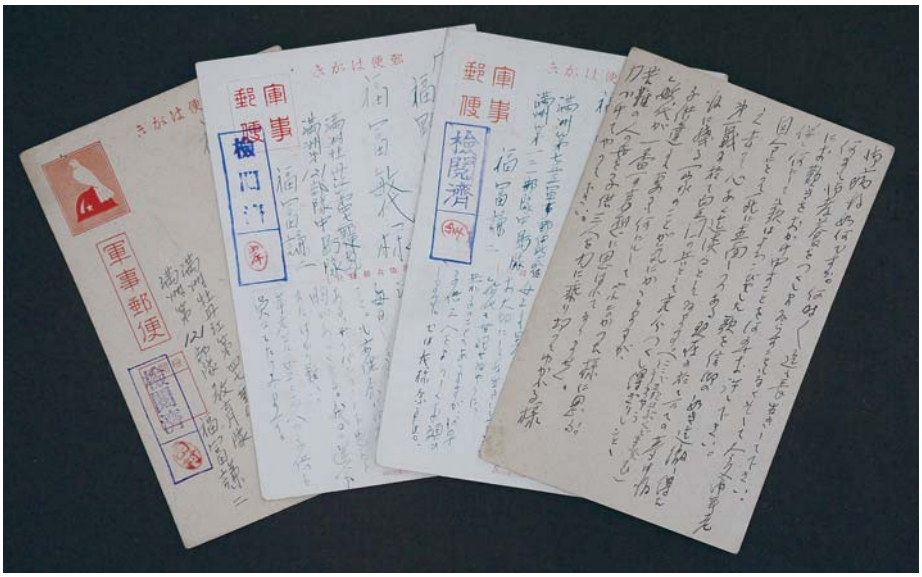


松井弘次宛 松井栄造 葉書
1943年頃

松井栄造は1918年静岡県浜松市出身、1937年４月早稲田大学第一高等学院入学。野球部で活躍し、1941年12月早稲田大学商学部を繰り上げ卒業。1942年２月召集、同年５月豊橋陸軍予備士官学校入学。見習士官として中国大陸に渡り、1943年５月湖北省姚家坊付近で戦死。

松井栄造書簡（1943年頃）

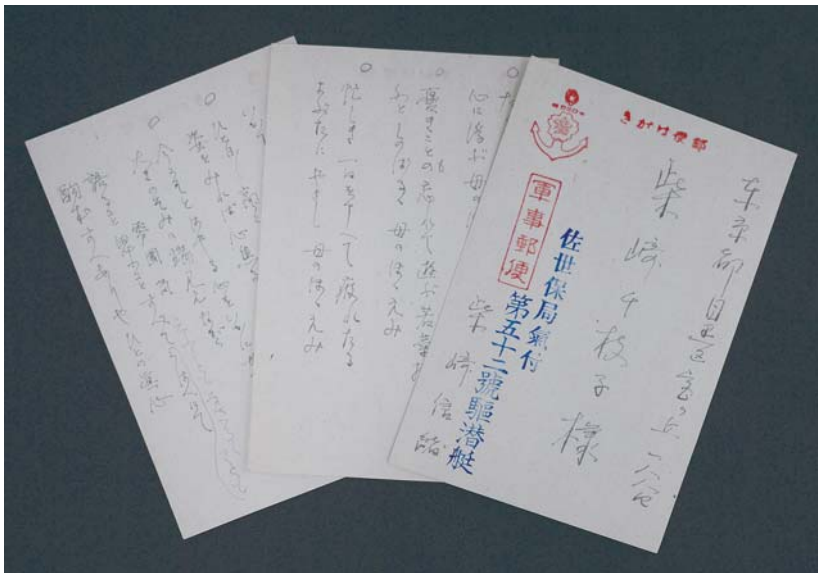
支那の生活も大分馴れて来ました、支那語も次第に
覚えて来ました、不自由なことはありません
唯本の無いこと丈が不自由です、何か送って下さい、
中央公論か改造か、文芸春秋か、何か毎月送って
頂けると都合が良いですが、一冊でも良いのです、きまったもの
がよいです、短歌研究でもいいです。それとマイナーハーモニカを
送って下さい、ナチュラルマイナーと二本頼みます。子供だまし
の様な慰問袋はゐりません、紀坊の所属部隊を
知らせて下さい、東京の石井さん、岐阜遠藤さんへは
時々手紙を差上げて下さい、内木さんへも頼みます



家族宛 福冨謙二 葉書
1944年春～1945年 4 月頃

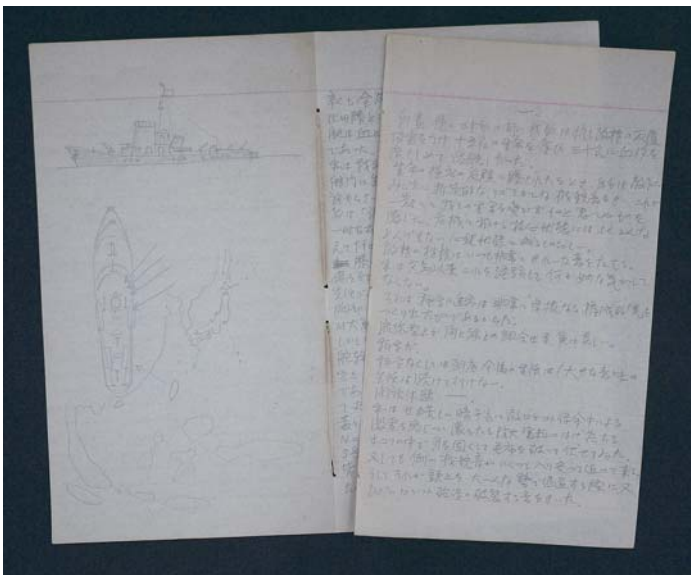
福冨謙二書簡（1945年 4 月頃）

御病状如何ですか。何時々々迄も長生きして下さい。
何にも御孝養をつくしまゐらすこともなくそして今又御年老
にお歎きをおかけ申すことを何卒お許し下さい。
併し何にしても歌はよろこびでした歌を信仰の如き迄徹し得た
自分にとって死に直面しつつある現在に於て万ての夢は消
え去って心あく迄淡々としてゐます。（ここでの歌は殆んど未発表になりませう）
第一戦に於て皇国の兵として充分つくし得ざりしこと、
後に残る一家のことが気にかゝりますが、
子供達にも妻にも何にもしてやれなかった様に思ふ。
敏代が一番可哀想に思はれてなりません。
苦難の人の世を子供三人を力に乗り切ってゆかれる様
力づけてやって下さい。



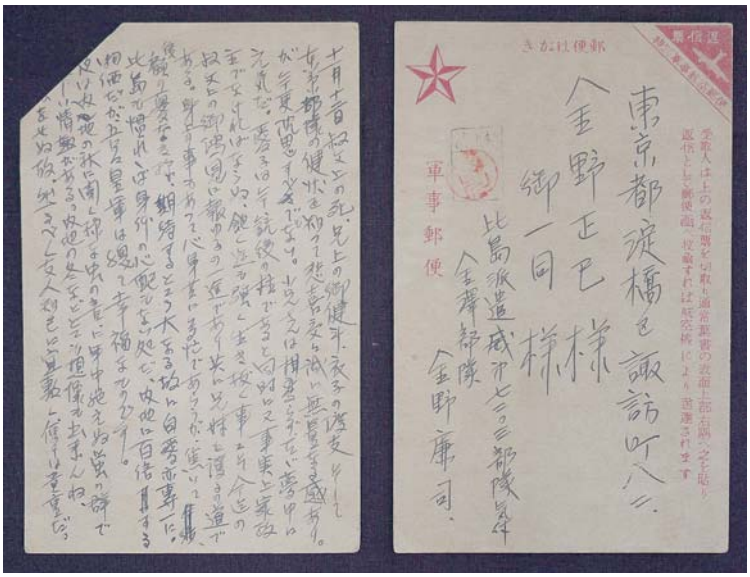
柴崎千枝子宛 柴崎信緒 葉書
1945年頃

乗艦中にしたためた短歌を、添削を請うため書き送ったもの。柴崎信緒は1923年生れ、1943年９月早稲田大学専門部法科を繰り上げ卒業。同年10月召集、主に通信士として護衛艦に勤務し、佐世保鎮守府で1945年８月15日をむかえた。



手記
柴崎信緒／1945年８月８日

1945年８月８日の午前、対馬東方海上を護衛航海中にＢ29及びＰ38編隊に急襲を受け、多数の死傷者を出しながら、対馬比田勝港へ入港後に書かれた手記。



家族宛 金野廉司 葉書
1944年秋頃

金野廉司は1920年生れ、1940年に専門部商科入学、1942年９月繰り上げ卒業。パイロット萬年筆株式会社へ入社直後に召集、1945年１月フィリピン・ルソン島で戦死。

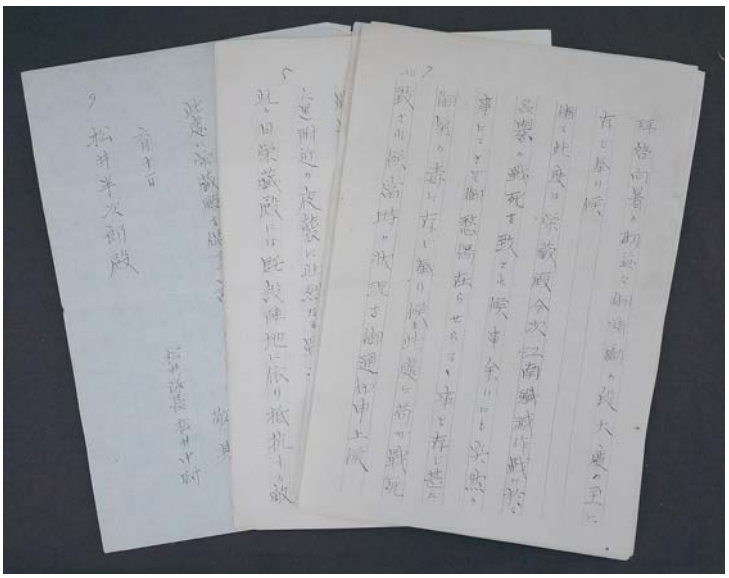
Ⅲ
戦場から“日常”へ

戦地における学徒の“死”は、さまざまなかたちで家族や友人たちにもたらされた。“死”をめぐる詳細な状況や、遺書を含む多くの遺品が、配属部隊の関係者によって家族のもとに届けられるケースも確かに存在した。しかし、その一方で戦死した場所さえ不確かなケースも存在したことを忘れてはならない。

また、学徒たちの“死”を受け止める家族の様相も多様であった。“仇をとる”云々といった勇ましいものもあったが、彼らの“死”に直面した悲しみを率直に表現したケースも存在する。彼らの“死”が戦意高揚に利用されることへの忌避感が存在したことも忘れてはならない。

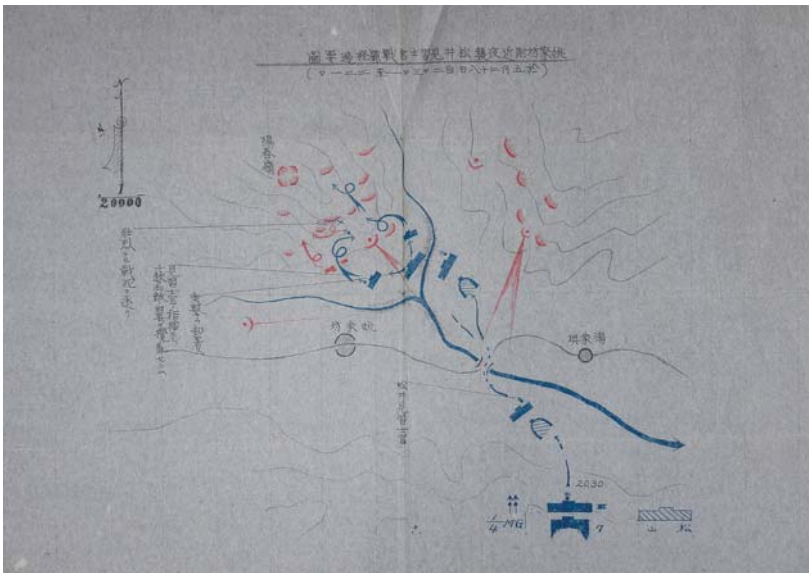
一方で、辛くも命を落とすことなく敗戦を迎えた学徒たちの“帰還”は、相当な困難を伴うものであった。着の身着のままの復員生活は、彼らが“敗残の兵”であったことを象徴した。また、“帰還”した彼らが目にしたのは焦土と化し、荒廃した“祖国”であった。復員後、学苑に復学し学業を再開した者もあったが、経済的な理由等によって学業の継続を断念しなければならなかったものも少なくなかった。

主な展示資料



松井半次郎宛 松井勲 書簡
1943年 6 月11日

松井栄造の戦死と、その死の詳細な状況を知らせる 9 枚にもわたる書簡。松井勲は栄造が所属した部隊の隊長。

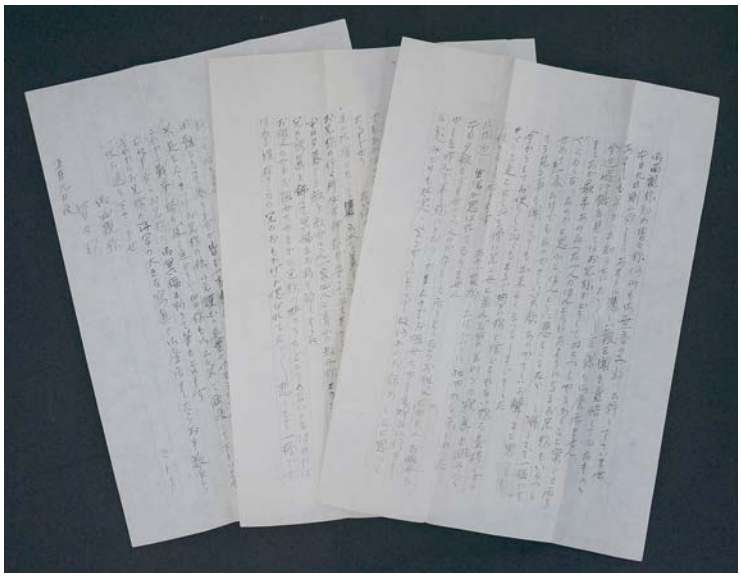


姚家坊附近夜襲　松井見習士官戦闘経過要図
1943年

この画像は著作権の関係で
表示できません。

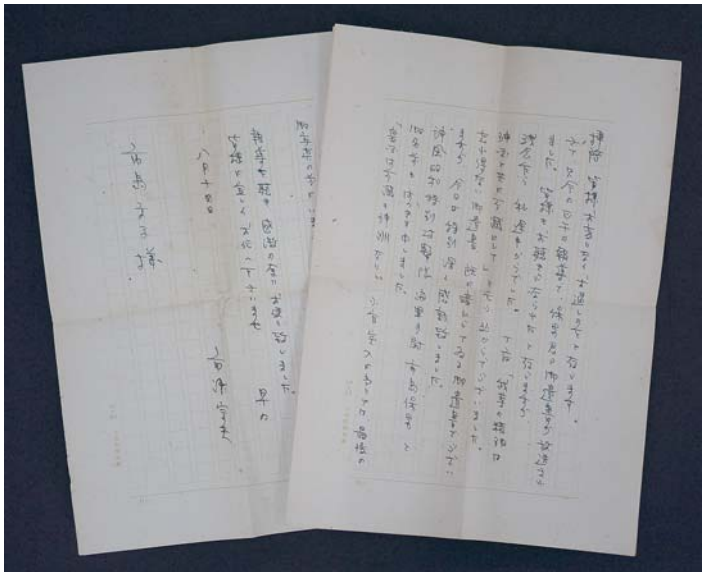
布告（神風特別攻撃隊琴平水偵隊員の死去について）
聯合艦隊司令官長　小澤治二郎／1945年 8 月10日

神風特別攻撃隊琴平水偵隊として、1945年 6 月25日から28日の 4 日間に戦死した 9 名の戦死とその状況に関する布告。 9 名の最初に早稲田大学高等師範部卒業生である椎根正の名前がある。



両親宛 馬越ミドリ 書簡
1945年 5 月 9 日

馬越ミドリは市島保男の妹。兄保男戦死の報に接し、両親宛てにその突然の悲しみと、亡き兄への想いを率直に綴った手紙。



市島文子宛 市瀬宗夫 書簡
1945年 8 月14日

市島保男の友人であり早稲田の同窓でもあった市瀬宗夫より遺族に送られた書簡。市島の遺書がラジオ放送で紹介されたことを伝えるもの。

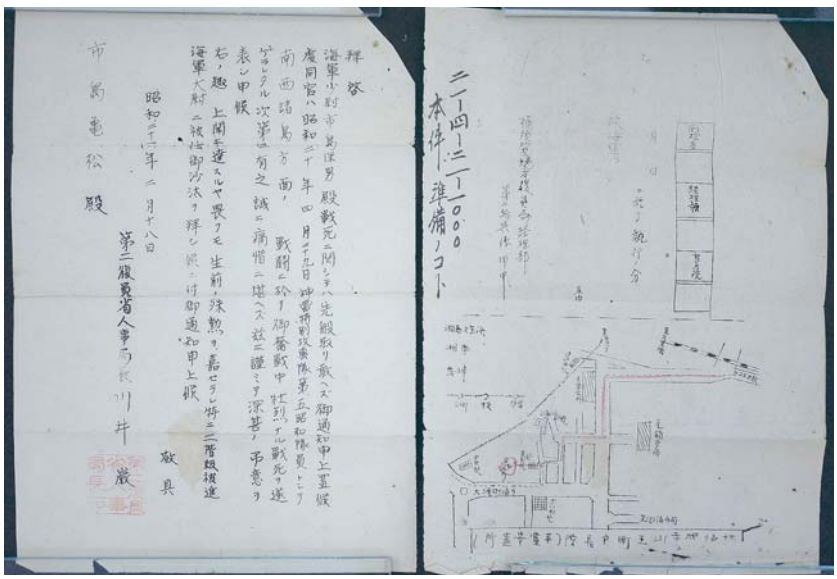
戦後を生きる

復員した学徒兵や戦死した学徒兵の遺族にとっての戦後は、戦死した学徒兵の“死”と向き合うことから始まった。

生還した元学徒兵のたちのなかには、自らが“死に切れなかった”ことを悔い、また戦死した学友への謝罪の意識を抱えた者も少なくない。自らの生存を悔やみ、それゆえに戦場での経験を語ることを憚った。本来であれば喜ぶべき自らの帰還が、生き延びた者にとっての重荷となることもあった。戦死した学徒たちが叶えることの出来なかった“生”とともに生きることが、遺された元学徒兵にとっての生存証明でもあった。

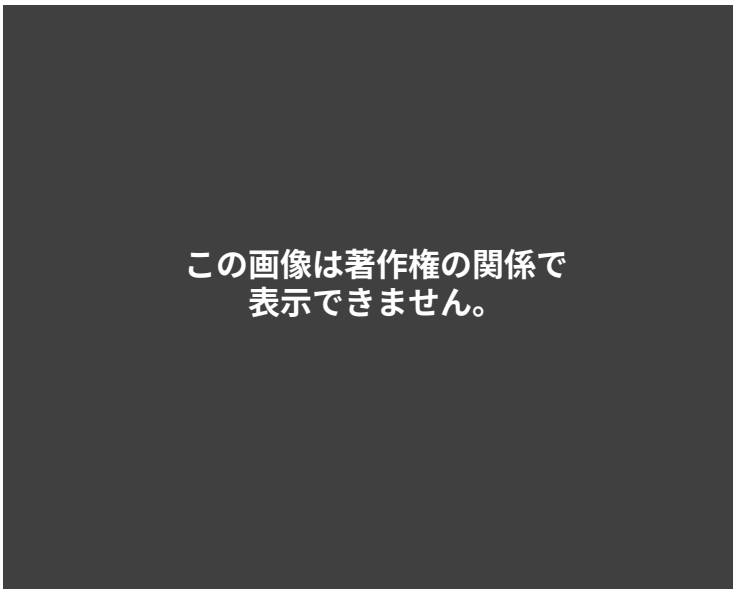
一方、戦死した学徒の家族にとって、彼らの“死”を受け入れるためには多くの時間を必要とした。戦死した場所やその原因すら明らかにされなかった遺族にとって、学徒の“生きた証”を明らかにすることが、彼らの死を受け入れるためには不可欠だったといえよう。同じ部隊に所属した人を捜し、死因や戦没地についての訂正を求める活動も存在した。

主な展示資料



通知（市島亀松宛）
第二復員省人事局長・川井巌／1946年 2 月18日

市島保男の戦死に関する情報、及び二階級昇進（海軍大尉）を知らせる通知。横須賀英霊安置所の案内を含む。



椎根正吉宛 越後郷子（復員業務課）書簡
5 月22日

椎根正の戦死状況について、より詳細な情報を問い合わせたことへの返書。椎根正と同じ部隊に所属した生存者の住所なども記されており、遺された家族の懸命な活動の一端をうかがうことができる。

柴崎信緒氏の回顧

（生還者にとっての“苦しみ”や“痛み”について問われ）

戦争と敗戦による敗北感は20代前半の人間の精神性をひどく傷つけ、その傷は自分でも癒すこともできないまま、消えないフィルムとなって心の奥底に残ってしまった。

自己を取り戻した時間に、ふと頭を持ち上げるのは“傷”の痛みであり、しばしば繰り返し登場する軍隊の経験である。夢にうなされて汗でびっしょりになって飛び起きたのは、復員直後から何年間かの間であったが、いまでも当時のありありとした断片が、時々脈絡なしにふと夢間に現れることがある。

柴崎氏へのインタビュー（2013年及び2014年に実施）から

【大西アヤ氏所蔵】
手記「妄念」
大西鐵之祐／1948年

大西鐵之祐は1916年奈良県出身、1939年早稲田大学商学部を卒業、学生時代にはラグビー部で活躍した。1940年１月召集、近衛歩兵第四連隊に配属、フランス領インドシナに出征した。敗戦をスマトラでむかえた大西は、マラッカでの収容所生活を経て、1946年６月に復員した。戦後は、早稲田大学教授のほか、早稲田大学ラグビー部監督・ラグビー日本代表監督としても活躍した。

人生の再出発

敗戦と共に、三十年培はれし思想と主義は歴史上になき、この事実の前に動揺した。過去二年間は自己の思想と主義に対する反省と再認識に終始された。然し自分の進んで来た道は決して間違つてゐなかった事を自覚すると共に、この基盤の上に立って、これから再出発すべき時代に到達した。昭和二十三年こそ、この年である。

（中略）

私は今日決心したこの方向に、大戦によって亡くなった幾多戦友に代わって、祖国復興に第一歩を進める。明るい祖国の再建に。

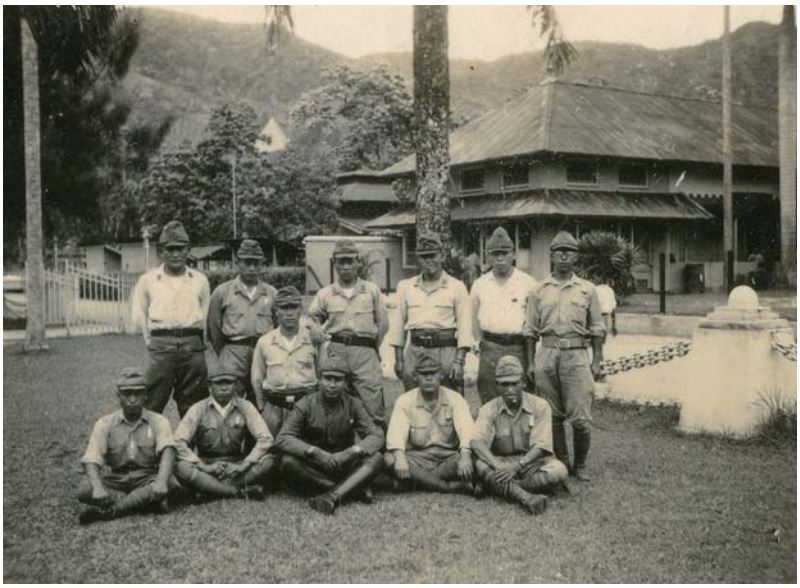
手記「妄念」の冒頭に記載

【企画】関口直佑、高木重治、檜皮瑞樹
【デザイン】八鍬麻衣

本展の開催ならびに本図録の編集にあたっては、以下の方々から多大なご協力を賜りました。心より謝意を表します。

阿山剛男、新井けい子、円田万紀、太田垣季利、大西アヤ、岸恭子、佐々木卓、椎根幸雄、志賀利吉、柴崎信緒、清水昇、新谷照、立原征士、田村八束穂、福富茂樹、細川春雄、堀家春樹、馬越千鶴、米津昭（敬称略）

2015年 3 月25日発行
発行者　早稲田大学大学史資料センター
〒202-0021　東京都西東京市東伏見3-4-1
Tel 042-451-1343　　Fax 042-451-1347
URL http://www.waseda.jp/archives/
印刷・製本　(株)三美印刷



2015年度春季企画展

学徒たちの戦場―戦後七〇年―

会期　2015年 3 月25日(水)～ 4 月25日(土)

会場　早稲田大学會津八一記念博物館（ 2 号館)・企画展示室

時間　10：00～17：00（入場は16：30まで）

©2014　Waseda University Archives　不許複製　非売品